

性解放理論の原点・フロイト主義を超えて

統一思想研究院 大谷明史

19世紀において性を罪悪視するキリスト教道徳が、絶対的な権威をもってヨーロッパの人々の心を支配していた。ところで当時、ヒステリーと呼ばれた不思議な病気があった。ヒステリーとは、身体にはどこにも異常がないのに、記憶喪失、幻覚、耳が聞こえない、口がきけない、立てない、歩けない、感覚がなくなるなどの症状を示す病的状態であった。そのようなヒステリーの患者に対して、催眠術を用いてその原因を探る試みがなされていた。その結果、それらは一様に、結婚生活における性的なフラストレーションや、過去の幼児期におけるいまわしい性的な体験に関係していることが明らかになってきた。しかし性を悪しきもの、恥ずべきもの、恐ろしいものとするキリスト教の性道徳のもとで、医学界では誰もその見解を公表しなかった。そのタブーに挑んだのがジークムント・フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) であった。

フロイトは催眠術のほかに、自由連想法、夢判断によって、患者の心の奥底にあるものを引き出していく精神分析の方法を探究していった。自由連想法とは、患者の意識に浮かぶ事柄を自由に発言させながら、心の奥底にあるものを見い出そうとする方法であり、夢判断とは、夢の中味を述べさせることによって、心の奥底にあるものを発見しようとする方法であった。

フロイトによれば、人間を根底から動かしているのは性的な衝動であるが、幼児期の性的虐待や結婚生活における性的フラストレーションなどによって、患者の心の奥深くに傷が生じている。しかし性を罪悪視するキリスト教道徳のもとで、患者はその心の傷を忘れようとして、その記憶を意識の外に追い出してしまふ。それがフロイトのいう「抑圧」(repression)であった。そしてこのような抑圧された心の傷が表面化することによって神経症などの症状が生じていると結論したのであった。当時のキリスト教は、性を悪なるものであると断罪していた。患者たちはそのような封建的道徳の被害者であるとフロイトは考えた。そしてそのような封建的道徳に対してフロイトは反旗を翻したのであった。

(一) フロイトの思想

1. 性的外傷説から心的外傷説へ

フロイトの発見によれば、ヒステリーの鍵を握るのは性的な衝動であり、それが抑圧されると神経症(neurosis)の症状が引き起こされるのであった。そして、神経症におけるほとんどすべての問題は幼児期まで遡るのであり、幼児期における性的虐待が神経症の原因で

あると、フロイトは考えた。いかなる症状から出発したとしても、最後にならず性的体験の領域に到達するように思われた。

患者は幼いころに受けた性的外傷を思いだしたくないため、そして誰にも知られたくないために、心の奥底に押し込めていた、すなわち抑圧していたものが、後に体に転化して現れたものが、神経症のヒステリーであると、フロイトは考えた。そして精神分析によって、患者の心の深層を探り、抑圧の事実を明らかにすることによって、患者は神経症から解放されると考えたのであった。ラッセル・ベイカー(Rachel Baker)は抑圧について次のように説明している。

われわれが承認できない感情を抱き、これに正面から立ち向かい得ないとき、われわれは、その感情が存在しないように思い込もうとする。われわれは、それを、われわれの意識的注意から追い出す。われわれは、それを押しつける。のちになって、フロイトは、その理論を構成したときに、この行為を「抑圧」とよんだ⁽¹⁾。

ところが患者の幼児期の悪い思い出は、必ずしも真実ではないことが分かった。その後、フロイトは性的エネルギーであるリビドーの意味を、生理的欲求というように拡大して、幼児にも性欲があり、それは年代とともに変化していくという、幼児性欲説を唱えた。リビドーの発展段階を口唇期、肛門期、男根期（男女の性別に目覚める時期）、潜伏期、性器期とした。初めに口で満たされていたリビドーは、性器期に至ると性器で満たされるようになるというのである。

このリビドーの発展段階のどこかで、リビドーが満たされなかったり、拒絶されたりして、リビドーの発展に固着点があった場合、それが後の偶発的体験が契機となって、固着点に退行するとき、それが神経症として現れるという。つまり幼児期における心の傷——心的外傷（*psychic trauma*）——と後の偶発的な外傷的体験(*post-traumatic stress disorder*)とが、互いにそろった時、神経症という目に見える形になって現れるのだという。ラッセル・ベイカーは、固着(*fixation*)について次のように説明している。

しかし、もし、成長してゆく子供が進行を止められ、感情的成長の、一つの段階から他の段階に移行してゆくことができないとき、すなわち、「固着」が生じたとき、彼は、他の方面では成長するであろうが、感情的にはナルチシズム期とかエディプスの愛着の段階とかに留まる場合が出てくることになる⁽²⁾。

ナルチシズム期とは、自分の身体のみに快感を見いだす、自己愛の段階であって、リビドーの発展段階の口唇期と肛門期に相当している。そしてエディプス期とは、異性の親を愛の対象として選ぶ時期であり、男根期に相当している。ラッセル・ベイカーは、神経症、ヒステリーの症状について次のように説明した。

このような人は、外面的には文明化しているが、内面的には原始的なままであるから、これに対して彼の意識は、彼を激しく罰する。……この内面の闘争は、さまざまな形をとって現われる。不成功、勉強での能力不足、神経症状、身体の病気、犯罪をふくめた反社会的行為および恐怖症、ヒステリー症状、強迫現象など神経の病気のすべての症状である⁽³⁾。

2. エディプス・コンプレックス

フロイトは、エディプス・コンプレックス(Oedipus complex)が、あらゆる神経症の核心にあると説いた。子供が異性の親と結びついたままで、エディプス・コンプレックスにうち克つことができない時に精神的疾患が起こる、というのが彼の仮説であった。エーリッヒ・フロム(Erich Fromm)によれば：

フロイトの言うエディプス・コンプレックスの意味は容易に理解できる。男の子はたとえば四歳ないし五歳という早い年齢に性的志向が目覚めるので、母親に対して強い性的付着と欲求をつのらせる。彼は母親を欲し、父親はかれのライバルとなる。彼は父親への敵意をつのらせ、父親に取って代わることを、そして結局は父親を殺すことを欲する。父親をライバルと感ずるために、男の子はそのライバルたる父親によって去勢されることを恐れる⁽⁴⁾。

フロイトのいうエディプス・コンプレックスとは、次のようなギリシア神話のエディプス王の物語に基づいたものである。

テーベ(Thebes)の王レイアス(Laius)と王女ジョカスタ(Jocasta)に、ある予言者が不吉な予言をした。“あなたの子供は成人して後、その父を殺し、その母をめとるのであらう！”子どもは生まれるとすぐに足を突きさされ、山中に捨てられ、死を待った。羊飼いが子どもを助け、子どもは他の国の王と王女の息子として成長した。……エディプスは道中で見知らぬ男——実はレイアス王——に出会い、口論のはてに男を殺してしまった。エディプスはテーベにたどりついた。街は、謎かけをして謎に答えられない者を食べてしまう怪物、スフィンクスの恐怖におびえていた。“朝は四歩足、昼は二歩足、夜は三本足、この動物の名は何ぞや？”“それは人間なり。幼きときは四本の足にて這い、成長したるのちには二本の足にて直立し、老いたれば杖でからだを支えるものなり”スフィンクスは敗れて海に身を投じた。エディプスはテーベの王となり、ジョカスタの夫となった。……エディプスは知らずにおかした自分の罪を知り、自分の両目を突いた。ジョカスタは自ら命を絶った⁽⁵⁾。(アッピグナネッセイ『フロイト』)

より)

この近親相姦幻想——母親に恋し父親を嫉妬する——を、フロイトはのちにエディプス・コンプレックスと名づけた。エディプス・コンプレックスを解消できずに成長すると、それが神経症の発症に大きく関わってくるとフロイトは考えたのである。

3. 心の構造——イド、エゴ、超エゴ

フロイトは人間の心をいろいろな角度から分析しているが、最も新しい心のモデルでは、心はイド(id,ドイツ語でエス es)、エゴ(ego, 自我)、超エゴ(super-ego, 超自我)という三つの部分からなる。イド(エス)が心のいちばん古い部分であって、動物的な本能ともいべきものであるが、エゴも超エゴもそこから生まれたものであるという。

フロイトはさらに、人間の心を根底から揺り動かしているのはリビドーという性的エネルギーであって、イド(エス)はリビドーの貯蔵庫であるという。つまり、イドの中に、リビドーが泉のように湧き出るということである。結局、リビドーすなわち性欲こそ人間のもっとも重要な駆動力なのである。

イドは盲目的な、動物的要求が宿っている所であり、人間精神の原始的な場所であり、暗いジャングルである。アンソニー・ストー(Anthony Storr)によれば、「エス[イド]は原始的で、明確な構成をもっておらず、情動的であり、‘非論理的なものの世界’である。エスとは、われわれの人格の、暗い、近寄りがたい部分である」。⁽⁶⁾

イドのみの人間は野生の動物的存在でしかあり得ない。野生の動物は勝手に異性と関係をもち、性のために闘い、殺しあったりする。フロイトは人間がそのような野蛮な状態になることを恐れた。そしてフロイトは、イドからエゴ(自我)が生まれてくるとして、人間は自らエゴによってイドをコントロールすべきであると主張するようになった。エゴはジャングル(イド)の片隅にある文明化された所、ジャングルの中の開拓地であるという。

フロイトはイドとエゴの関係を暴れ馬と騎手の関係にたとえている。熟練した騎手によって、暴れ馬をよく操れば、馬は素直に騎手に従うようになるというのである。偉大な人は、内部に大量に蓄積している野蛮な衝動を飼いならし、方向づけ、上昇させる力と意志を発達させた者である。ラッセル・ベイカーによれば：

野蛮な衝動と人間の文明化された意志の間の闘争のうちに、ジャングルと開拓地の激しい戦いのうちに、フロイトは人生における、すべての成功と失敗の理由、文明のすべての創造的な仕事の源泉、すべての犯罪、すべての病気の原因があると考えたのである⁽⁷⁾。

フロイトはさらに、エゴの一部に裁判官の役割をする場所があるのであり、それを「超

エゴ」(超自我)と呼んだ。超エゴとは、「～してはいけない」と命令する裁判官のような内面の権威である。超エゴは両親、特に父親からの叱責、キリスト教を始めとする宗教の戒律に由来するものであるという。超エゴがエゴを監視し、エゴがイドを抑圧、コントロールしているというのである。

フロイトは、神経症の患者のみならず、自分自身をも治療した治療家であり、彼以前の、どの思想家よりも人類の心の内部を深く覗いた人間であり、彼は人間の野蛮な心のなかを覗き続けたのである⁽⁸⁾。

4. 昇華

フロイトは、人間の心を根底から揺り動かしているのはリビドーであるという。ところがリビドーの宿るイドの衝動のままに生きる人間は野獣と変わらない。そこでフロイトはイドの野蛮な力を「昇華」(sublimation)させなくてはならないと主張した。昇華とは、リビドーのエネルギーを必要な現実適応に向けさせることであり、イドの野蛮な力を新しい目的に転じてゆくことである。

ラッセル・ベイカーは、昇華について、「すべての人間は自分の心のなかに荒れ狂っている強い衝動を操る力を発展させねばならないのだ。これこそ、おとなになるという意味であり、それは、われわれの内部にある野蛮な力を、役に立つ目的に昇華する能力である」⁽⁹⁾と言う。

フロイトはリビドーを昇華させることにより、芸術、文学等の文化が生まれると考えた。すなわち、あらゆる芸術や文学は、満足を得なかったリビドーの昇華から生まれるとフロイトは信じていた。ところがエゴの力が弱くて、イドの力を昇華できなかつたり、あるいは超エゴの力が強すぎる場合、人は神経症になるという。ラッセル・ベイカーによれば：

フロイトは、イドの本来の力、つまり、発散できない野蛮な願望や衝動があつて、自我が弱すぎて、これを昇華できないようなとき、病気をおこすことを示した。彼はまた、超自我または良心の要求が強烈すぎて、われわれが、ときに、われわれ自身に対して残酷すぎる扱いをすることも指摘した⁽¹⁰⁾。

5. 性と愛

フロイトは、愛は人間にとって本質的なものでなく、性的エネルギーに付随するものと見なしている。すなわち、フロイトにおいて、性が先に来て、愛情は後である。そして人間の心には、本来、強固な敵意が秘められていて、愛などによって多くの人間を結び合わせるなど、とてもできないと、フロイトは考えていた。アンソニー・ストーによれば：

フロイトの頭には、友情のような、それ自体が価値あるようなタイプの人間関係はない。あらゆる人間関係は、「目標を禁じられた」性的関係の代理物である。フロイトが「おのれのごとく隣人を愛せ」というキリスト教の戒めを否定したのも当然だ⁽¹¹⁾。

フロイトは「人間はすべての女性を征服しようとする果てしのない願望によって操られている⁽¹²⁾」と見ている。野生の動物世界において、雄は雌をめぐって雄同士が戦い、勝ち抜いた強い雄が多くの雌を独占するように、人間においても、男は多くの女を征服しようと男同士が争うというのである。

6. 快感原則と現実原則

フロイトによれば、人間は快感原則(pleasure principle)と現実原則(reality principle)という二つの原則に従っているという。イドが快感原則——快を求め、不快を避けること——に従っているのに対して、エゴは、現実原則——欲求をそのまま満たすことを我慢して、現実に見合った形でみたそうとすること——に従おうとする。かくしてエゴにより、人間のからだに満足感の遅れや延期を我慢させ、人は「考える」ようになるのである。デイヴィッド・コーエン(David Cohen)は次のように述べている。

イドは、各人の本能的エネルギーの無意識的源泉である。それはリビドー——性的欲望であり生きる力——の巨大な貯蔵庫である。“快感原則”に従って、がむしゃらに手っ取り早い満足を追求する。この衝動の塊から、パーソナリティの現実的で合理的な部分である自我が発達してくる。自我はイドを満足させようとするが、現実世界の制約の枠内でそれをしなければならないことを承知している⁽¹³⁾。

生まれたばかりの赤ん坊の心は、大部分がイドで占められているが、イドはただ、快感原則に支配され、本能的欲求を満足させようとするだけである。やがて赤ん坊が成長するにつれて、エゴが発達し、現実原則に従うようになる。

快感原則と現実原則はたがいに相反するように見える。しかしながら、フロイトにおいては、「快感原則と現実原則はたがいに相反するものではなく、……現実原則は、同じ目的——つまり快感——を得るためのより時間をかけた複雑な過程にすぎない⁽¹⁴⁾」のである。

7. エロスとタナトス

フロイトによれば、人間は本来、野蛮な性的人間、あるいはむしろ性的動物というべきものであり、たがいに憎しみと敵意を抱く存在であるとされていた。そしてリビドーの宿るイドを別の形態に昇華させることによって、人間は、人格的な文化的な存在になるというのであった。愛などによって人間を結び合わせるなど、とてもできないと、フロイトは

考えていた。ところが1920年以後、フロイトは、性本能と自己保存本能を統合した生命力という意味で「エロス」(Eros)という言葉を用いて、エロスによって人と人は結びつけられると主張するようになった。フロイトはさらに、エロスに対立する破壊本能としての「タナトス」(Thanatos)が人間の内部にあると主張した。フロイトは次のように書いている。

長い躊躇と動揺を経て、われわれはついに二つの基本的本能、エロスと破壊本能の存在を認めることに決めた。……前者の目標は、統一体を確立して、それをどんどん大きくしていき、それを維持する、要するにしっかり繋ぎ留めておくことである。後者の目標は反対に結合をばらばらにし、それによって事物を破壊することである。破壊本能の場合、その最終目標は生物を無機的状态に導くことだと考えられる。それゆえ、この本能を死の本能と呼ぶこともできよう⁽¹⁵⁾。(『精神分析学概説』)

小此木啓吾は、本来、狼のような人間が、エロスによって互いに親密な関係になるという。

「人はみな狼」の喩えのように、それぞれの欲望、自己主張、競争心をもち、お互いに対立し、敵対し合っているはずなのに、社会集団を形成し、その中で生きる場合には、何故これらの対立・敵対関係を抑圧し、友好的で親密な感情を共有するのであろうか。ひとえにそれは、お互いを結びつけるエロス(性愛)があるからである⁽¹⁶⁾。

エーリッヒ・フロムは、フロイトのいうエロスとは、フロイトの原点であった性とは異なる、全く新しい概念であるという。

エロスの理論においては、人間はもはや本来孤立した自己中心的な存在として、機械人間としてとらえられることはなく、本来他人と関係を持っていて、彼をして他人との結合を要求せしめる生の本能に動かされる存在として、とらえられる。生命、愛、成長はまったく同じものであり、性愛や〈快樂〉より深い根を持ち、より根本的なものである⁽¹⁷⁾。

かくしてフロイトはエロス理論を持ち出すことによって、古い二元論——エゴとイド(リビドー)——に代わって、新しい二元論、すなわちエロスとタナトス(死の本能)の戦いを提示したのである。アンソニー・ストーは、フロイトの提示した「エロスとタナトスの戦い」について、次のように述べている。

文明とは、エロスに仕える一つの過程である。エロスの目的は、個々人を、人類という一つの大きな単位へと統一することである。……ところが人間に生まれつきそなわ

っている攻撃本能、すなわち万人の万人にたいする憎悪が、この文明の計画に反対する。この攻撃本能は、エロスとならんで宇宙を支配する二大原理の一つである死の本能から生まれたものであり、死の本能を代表しているものである。……文明とは、人類の間で繰り広げられる、エロスと死との、生の本能と破壊本能との、戦いなのである。……したがって文明の進展はたんに、生に向けての人類の戦いであると言うことができよう⁽¹⁸⁾。

かくしてフロイトはエロスとタナトスという善と悪の闘いという壮大なビジョンを打ち出したのであった。ポール・ロビンソンによれば、

ウィーンの上流階級の神経症を理解しようと必死になっていた医師がその研究から、人間の条件に関するこんなに壮大な概念を引き出すとは、誰が予想していただろうか。性と攻撃の二重性の探究は、善と悪という二つの大きな力が対立するという宇宙的なヴィジョンへと変えられた⁽¹⁹⁾。

8. 性の民主主義、理性の崇拜

「イドと超エゴに対して、ともに闘え」

キリスト教道徳による性の抑圧に反旗を翻したフロイトであったが、結局、人間は一人一人、自ら性をコントロールすべきであると主張したのである。すなわちフロイトは、性に対するキリスト教による封建主義的、君主主義的、専制的な抑圧から人々を解放し、人間が主体的に性をコントロールする「性の民主主義」を主張したのであった。言い換えれば、彼は外的な強制的な性の抑圧に反対し、内的な自律的な抑圧を説いたのである。フロイトの有名な言葉がある：

精神分析療法の意図は、自我を強くし、もっと超自我から独立させ、その組織を拡大し、それによって自我がエスの新しい部分を自分のものにできるようにすることである。かつてエスがあったところに自我をあらしめなければならない。それは一つの文化事業であり、オランダのゾイデル海の干拓と似たようなものである⁽²⁰⁾。(『続・精神分析入門』)。

「自我」は、イドに対抗して自己を防衛するように、「超自我」に対しても自己を防衛しなくてはならない⁽²¹⁾。すなわち、「エゴはエス（悪しき衝動）と超自我（封建的道徳）に対してともに闘え⁽²²⁾」というのである。

9. 性道徳の破壊と宗教の否定

フロイトは道徳や倫理の起源に関して、次のような「原父殺害」の仮説を立てた。原始の遊牧民において、父親（原父）は絶対的な権力を持ち、女たちを独占し、息子たちを排除し、従属させていた。そこで息子たちは父を憎み、殺して食べてしまった。その後、父を殺したことを悔い改めた息子たちは、このような行為を再び繰り返さないようにするために規約をつくった。すなわち、殺害した父を神として崇めて、父を象徴するトーテム獣を殺すことを禁じたことと、同族の女たちをめぐる争うことのないように近親相姦を禁じたことである。それは「一種の社会契約」であって、それが「道徳と法のはじめ」であったという。原罪といわれる罪の意識や宗教や倫理の起源も、この「原父殺害」にあるという。

そのようにして、恐れられ、憎まれ、尊敬され、うらやまれていた父が、神として崇められるようになったのであり、宗教とは「父コンプレックス」の土台の上に成立したものであった。このようなフロイトの解釈によれば、道徳や倫理は絶対的な父権を中心とした権威体制の反映であり、一種の強迫観念的な掟であった。そのようなフロイトの立場から見れば、キリスト教は一つの集団幻想であり、空想の産物にすぎなかった。結局、フロイトにおいて、神とは架空の存在であり、規範とは、権威的、抑圧的な「掟」であり、一種の「タブー」であった。

フロイトによれば、個人の幼児期の体験が脅迫的な力をもって個人の心理の中に迫ってくるのが強迫神経症（obsessional neurosis）であり、小児期神経症（childhood neurosis）である。おなじく個人の幼児期の体験がおとなの社会に投影され、強迫的な力をもって集団心理の中に迫ってくる集合的神経症（collective neurosis）が宗教であるという。つまり、宗教は、個人の幼児期体験の外界に投影されたもの、すなわち幻想であると言い切ったのである。

ピーター・ゲイ(Peter Gay)が言うように、「宗教信仰とは一種の文化的神経症だというフロイトの極端な信念なのだ。彼はこれを公言していた。すなわち、宗教は大人の生活のなかでの幼弱的無力感の遺物であり、願望思考の最良の事例、妄想的な病気すれすれの幻想なのである⁽²³⁾」。

フロイトは科学の発展とともに宗教は崩壊すると信じていた。ピーター・ゲイによれば、「ディドロは1759年に‘宗教は哲学が進むに応じて後退する’と書いていた。フロイトもこれに同意した。善意の人間が科学の家を建てることができるのは、宗教の廃墟の上のみであろう、と。フロイトは科学と地盤を争うことのできる三つの勢力——芸術、哲学、宗教——のうち、‘手強い敵は宗教だけである’と書いた⁽²⁴⁾」のであった。

フロイトは、『ある幻想の未来』の中で簡潔に述べているように、「理性より以上の控訴審は存在しない⁽²⁵⁾」と考えていた。そして「人間は、自分が自然の主となり、また自分自身の主となるまで、理性を発展させて行かねばならない⁽²⁶⁾」というのがフロイトの信念であった。かくしてフロイトは、理性の名の下で、宗教に宣戦布告を行ったのである。

(二) 統一思想から見たフロイト思想

1. 性的外傷説から心的外傷説へ

フロイトは始め、神経症の原因を幼児期における性的虐待によるものと見て、性的外傷説を唱えた。しかし、必ずしもそうでないことを悟り、後に、幼児にも性欲があり、それは年代と共に変化していくという幼児性欲説を主張するようになった。そして人間の心を根底から動かしている性的エネルギーであるリビドーが、過去のある時期において阻止され、満たされなかった体験——心的外傷（トラウマ）——によって、リビドーの固着があった場合、後に何らかの偶発的な外傷的体験によって、その過去のリビドーの固着点に無意識に退行して起きる現象が神経症であると説いた。

しかし統一思想から見れば、人間を根底から動かしているのは性的エネルギーではなく、心情（愛したい、愛されたいという衝動）である。したがって、人間の心の傷となって神経症を引きおこしている本質的なものは、幼児期の心的外傷によるリビドーの固着ではなく、心情の傷であり、愛の傷である。心的外傷も、もちろん傷の一部をなしているが、それがすべてではない。より根本的には愛の傷なのである。すなわち父母から、兄弟姉妹から、あるいは周囲の人たちから冷たくされたり、虐待されたり、あるいは周囲の期待に答えられなくて挫折したりしたことによる愛の傷が原因なのである。

さらに心理的な問題は、幼児期の体験のみならず、霊界の先祖たちまで、さかのぼる。すなわち、われわれの心の傷は、幼児期の心の傷のみならず、先祖たちの心の傷（悲しみ、怨み、憎しみなど）も加わっているのである。なお先祖たちの心の傷には、他人から受けた傷と他人に与えた傷がある。他人に与えた傷は、傷を受けた人（霊人）の怨念となって地上の子孫であるわれわれにふりかかっているのである。したがって心の病気の解決は、個人の幼児期からの精神的な治療だけでは不十分であり、霊界までさかのぼって先祖たちの心の傷を解決することまでなされなくてはならないのである。

カール・ユングは、個人の意識の下には個人的無意識（各人独自の経験に由来する抑圧された記憶や欲望）が横たわっているが、さらに深いところに集団的無意識（われわれの先祖から相続した記憶や行動パターン）があると考えた。そのようなユングの心理学は統一思想の見解を裏づけるものといえよう。

心の傷を癒すのは真の愛であるが、愛によって幼児期からの心の傷を癒すのみならず、霊的に先祖の心の傷を癒していくことも必要である。ここに宗教的な先祖の供養とか、先祖の解怨の意義がある。しかしながら、心理的な治療のみならず、形状的な生理学的治療も必要である。すなわち、性相的には霊界の先祖解怨と精神療法を行いながら、形状的には最先端の現代医学による生理学的治療もなされなくてはならない。

2. エディプス・コンプレックス

フロイトはギリシア神話に基づいて、幼い男の子は、母親に対して性的な関心を抱き、母親を独占したいと願い、そのために父親にたいして憎しみの衝動を抱くという。これが男の子のエディプス・コンプレックスである。他方、女の子は男性性器のない母親に幻滅し、母親を憎み、父親に愛情を向けるようになる。これが女の子のエディプス・コンプレックスであるという。

統一思想から見ると、ギリシア神話に由来するエディプス・コンプレックスとは、父母が子女を愛する父母の愛と、子女が父母を愛する子女の愛に、ゆがんだ性愛を混入させたことから生じたものであり、心の中の暗闇に焦点をあてたものである。本来、父親が娘を愛する愛も、母親が息子を愛する愛も、性愛とは無関係である。また娘が父親を愛する愛も、息子が母親を愛する愛も、性愛とは無関係である。しかるに人間始祖アダム・エバの墮落によって、墮落した男女の愛が、愛全体の中に混入するようになったのである。その結果、近親相姦が生まれ、エディプス・コンプレックスのようなものも生まれたのである。

子女は母の愛に抱かれながら成長し、父の愛でたくましく育てられる。子女にとっては、母の愛と父の愛の両方が必要である。そのような父母の愛の下で子女は成長していくのである。一方、子女が父母を愛するとき、父母はそのような子女の愛を可愛らしく思い、より一層子女を愛するようになる。そのような本然の父母の愛、子女の愛は、性愛とは全く無関係である。結局、ギリシア神話もフロイトも、墮落した愛、ゆがんだ愛を見つめたのであった。

神経症はエディプス・コンプレックスが解消されなかったから生じるのではない。幼児期に、父母から愛されなかったこと、あるいは虐待されたこと、周囲の人からいじめられたこと、挫折したことなどが心の中に愛の傷として残り、その傷を受けた心理状態に退行することによって生じるのである。さらに、すでに述べたように、幼児期のみならず、先祖からの影響もあるのである。

エーリヒ・フロムも「フロイトが誤っていた点、また彼の前提のゆえに誤らざるをえなかった点は、母親への付着を、本質的に性的性質を持ったものと理解したことである」⁽²⁷⁾と述べている。

3. 心の構造——イド、エゴ、超エゴ

フロイトのいうイド（リビドーを含む）とエゴからなる人間の心の構造を図示すれば、図1のようになる。

フロイトにおいて、エゴの役割はジャングルの猛獣が互いに争わないように「檻に入れる

こと」または「柵で仕切ること」である。ジャングルの猛獣は互いに殺し合ったりして危険であるが、檻の中に閉じこめたり、柵で仕切ることによって争わなくなる。それと同じように、エゴによってイドを抑えることによって、動物的な人間が文明的な人間になるというのである。

フロイトのいう文明社会とは、猛獣たちを檻に入れた平和な動物園のようなものである。しかし猛獣は檻から放てば元の猛獣に戻るのみである。結局、フロイトの見た人間は本質的に野獣的な性的動物なのである。フロイトの「人間[男]はすべての女性を征服しようとする果てしのない願望によって操られるもの」という言葉がそのことをよく表している。

先に述べたように、フロイトのいうイドとエゴは統一思想から見れば、生心と肉心に相当するといえる。しかし、統一思想において生心は霊人体に宿る心であるのにたいして、人間の霊性を認めないフロイトにとって、エゴは根拠のないものである。フロイトはイドという衝動の塊から、エゴが発達してくると考えていた。しかし、いかにして動物的なイドからエゴが発達するのか、なぜ動物にはエゴが発達しないのか、不明である。フロイトは人間の霊性を認めていないので、彼のいうエゴは根拠のないものであった。

さらにフロイトはエゴによってイドを抑圧せよと主張したが、統一思想の観点から言えば、真の愛を中心とすれば、肉心は生心に共鳴し、自然に従うようになるのである。フロイトにとって、性とは獣的なものであって表面化しないように抑圧すべきものであった。しかし統一思想から見れば、真の愛を中心として生心と肉心が円満な授受作用を行うとき、肉心の性は聖なるものとなるのである。

心情、すなわち「愛して喜びたい衝動」は人間の心の中で最も核心となっているものである。したがって統一思想の観点から人間の心の構造を図示すれば図2のようになる。フロイトのいうエゴとイドはそれぞれ統一思想のいう生心と肉心に相当するものといえよう。しかるに図1と図2を比較すれば、フロイトと統一思想の見る人間の心の構造は、重要さの順序がまさに正反対になっていることがわかる。

生心と肉心が一つになるための究極的な要因は心情から湧きいずる真の愛である。真に子供を愛している父母は、自分の肉心の欲求を満たすよりは、まず子供によく食べさせ、よく着せ、よく住ませたいと願う。自分の欲求を満たすよりはそのほうが父母の喜びとなるのである。また子供が危機に瀕するときには、わが身を顧みずに、火の中、水の中に飛び込んで救おうとする父母の例は枚挙にいとまがない。従って、真の愛を中心として生きるようになるとき、肉心は生心に自然に従うようになり、肉心は生心に共鳴するようになるのである。

マルクス主義は「人間はなによりもまず飲み、食い、住み、着なければならぬ」、「猿が労働して人間となった」と見ている。すなわちマルクス主義の人間観は「衣食住を求めて労働した猿」である。ダーウィニズムは、人間は衣食住と性を追求してやまない、「生存の本能に駆られた動物」であり、生存競争に勝ち抜いた「生存に適した猿」である。フロイトにおいては、人間は性的な衝動に駆られている「性的人間」であり、「性的動物」である。結局、

マルクスも、ダーウィンも、フロイトも、人間を本能的、動物的存在と見たのであった。

フロイトによれば、キリスト教封建道徳の下で、人間は抑圧されていた。超エゴとはキリスト教封建道徳の内在化されたものであり、その超エゴの支配のもとでイドの衝動が強制的に抑圧されていた。フロイトのいう、キリスト教道徳の下での抑圧された人間像を表示すれば、図3のようになる。

フロイトの人間観の原点は「性的人間」であったが、やがてフロイトは、超エゴによってイドを強制的に抑圧するのではなく、個人が自律的(self-regulating)にイドを抑圧すべきであると主張した。かくして、フロイトの人間観は「性的人間」から「理性的人間」の装いをしたのであった。フロイトのエゴとイドからなる人間観、統一思想の生心と肉心からなる人間観を統一思想の四位基台構造の観点から表示すれば、図4のようになる。さらにキリスト教道徳下における神経症の発症のメカニズムを図示すると図5のようになる。

4. 昇華

エゴによるイドのコントロールの方法としてフロイトが考えたのが、「本能的欲求が、政治、芸術、音楽などの直接的満足以外の目的に向け換えられる過程」としての「昇華」であった。すなわち、リビドーのエネルギーに駆られた野蛮なイドが表面化して外に出ないように、あるいは前面に出ないようにすることであった。これはまさに「クサイものにフタ」をすることである。フロイトのいう昇華を図示すれば図6のようになる。

フロイトはイド(リビドー)を昇華させればよいと言うが、イド(リビドー)を昇華すれば、人は必ずしも人格的存在となるのではない。芸術家、芸能人、スポーツ選手に不倫が蔓延している現実が、それを証明している。統一思想から見るとき、人間は、真の愛を中心として、生心と肉心が主体と対象の関係で円満な授受作用を行う時、肉心すなわち本能的な心は生心に自然にしたがうようになる。そのとき、性は悪しき衝動ではなくて、聖なるものとなる。真の愛は、自己中心的な、自分の欲望を満たそうとする愛ではなくて、与える愛、ために生きる愛である。相手をいたわり、人格を尊重し、相手の喜びが、自分の喜びとなるような愛である。

人間を根底から動かしているのはリビドー、すなわち性的エネルギーではない。人間は愛し、愛されたいという愛の衝動に動かされている愛的人間である。すなわち、神を愛し、神から愛されたいと願う、人を愛し、人から愛されたいと願う、万物を愛し、万物から慕われたいと願うのが人間の本性なのである。

5. 性と愛

フロイトにおいて、愛とは「性的結合を目標にしたところの性愛」のことであった。そこには本来の愛というものは全く見られない。そして実際、フロイト主義者たちによる『精

神分析用語辞典』を見ても、そこには「愛」という言葉は見当たらず、あるのは「性器愛」という表現だけなのである⁽²⁸⁾。結局、フロイトの思想は人間の霊性を否定し、愛を性欲に還元するものであり、愛を窒息させようとするものであった。フロイトの人間観は正に「性的人間」であり「性的動物」であった。それに対して、統一思想の観点では、性は真の愛のためにあるのであって、愛が主体、性は対象である。したがって、統一思想の人間観は「愛的人間」であり、「心情的存在」である。

6. 快感原則と現実原則

フロイトによれば、快感原則とは、快を求め、不快を避けようとするイドの従う原則であり、現実原則とは、欲求をそのまま満たすことを我慢し、延期する、エゴの従う原則であるという。そして現実原則も結局は快感を求めるための時間をかけたプロセスであって、両者はともに快感を求めているのだという。そのような人間は衣食住と性欲を中心とした本能的な存在であって、真善美と愛の価値を求める人格的存在ではない。結局、現実原則に従う人間とは、行儀のよい動物と変わらない。

統一思想の観点からみると、人間が従うべき原則とは、生心が従うべき規範(倫理、道徳)である。それは肉心の欲求を我慢し、延期させるためのものでなく、肉心の機能を真の愛の実現へと導くための愛の道しるべであり、愛の道である。

7. エロスとタナトス

フロイトは、愛などによって人間を結び合わせるなど、とてもできないと考えていた。ところが後に、フロイトは、性本能と自己保存本能を統合した生命力という意味でエロスという言葉を用いて、エロスによって人と人は結びつけられると主張するようになった。性的エネルギーであるリビドーは本来、敵対的であるとされていた。ところがエロスと言っても性本能に自己保存本能が加わっただけで、性本能とあまり変わらない。実際、フロムが指摘しているように、『自我とエス』(1923)において、彼はエロスを性本能と同一視しているのである⁽²⁹⁾。ところがなぜ、リビドーは敵対的なもので、エロスは友好的なものなのか、納得いく説明がなされていない。

8. 性の民主主義、理性の崇拜

「イド(エス、悪しき衝動)と超エゴ(封建的道徳)に対してともに闘え」というのが、フロイトのモットーであった。それを図7に図示する。

マルクスは資本主義社会において、資本家と労働者の階級対立があり、資本家が労働者を支配し、搾取していると見た。そして労働者が資本家を倒して、すべての人が労働者に

なれば、労働者は解放され、自由な理想社会が実現できると考えていた。しかし実際は、労働者の代表であるという名の下に、共産主義者が権力を奪取し、共産党が人民を暴力で支配する独裁社会となってしまった。

一方、フロイトは心理的な葛藤からの解放を叫んだ。すなわち人間の心の中にはイド（リビドー）とエゴの葛藤があり、さらに超エゴによる抑圧があると見た。そして、各自の自律的な理性によって、イドの悪しき衝動と闘い、さらに超エゴによる抑圧と闘えと叫んだのである。かくして人間は解放され、理想的な姿になると、フロイトは考えたのであった。経済的抑圧からの解放を叫んだマルクスに対し、フロイトは心理的な、性的抑圧からの解放を叫んだのであった。

しかしその結果、フロイトは絶対的、普遍的な規範を否定することにより、性行動の決定は個人の意思にまかせるべきであるという‘性の自己決定(self-determination)’の主張に道を開くことになった。さらに人間を本来、性的な存在と見ることから、自然の成り行きとして、フロイト左派の性解放理論が生まれることになった。フロイト自身は性解放には反対であったが、彼の理論は、下半身では性本能、上半身では理性主義というものであった。それはフォイエルバッハにおいて、下半身は唯物論、上半身は観念論であって、自己矛盾していたのと同様に、フロイトにおいても自己矛盾を抱えていたのである。

フロイトのそもそもの出発点は、人間は性的衝動に駆られた本能的な存在と見るところにあった。ところがエーリッヒ・フロムが言うように、「フロイトは決して性的自由思想の代弁者ではなかった。むしろ反対に、私が前に述べようとしたことだが、彼の理想は情熱を理性によって統制しようとしたことであつたし、彼自身の性に対する態度は、ビクトリア風の性的習慣の理想に従っていたのである⁽³⁰⁾」。そのように、フロイトの主張には自己矛盾があった。

フォイエルバッハにたいして、下半身は唯物論者であるが、上半身は観念論者であると言って批判したのはマルクスであった。そしてマルクスは全て唯物論で一貫している理論を構築しようとしたのであった。同様に、フロイトの矛盾性を批判するライヒやマルクーゼのようなフロイト左派が生まれた。彼らは性本能、リビドーに基づいた一貫した理論を構築しようとした。その結果が性解放理論となったのである。

統一思想の観点では、エゴとイドの関係は生心と肉心の関係であるが、両者は対立、闘争の関係ではない。愛と規範を中心とすると、生心は肉心と円満な授受作用を行い、両者は共鳴するようになる。すなわち、肉心は生心に自然と従うようになるのである。フロイトはさらに、超エゴを構成しているものは宗教的道德であって、それが人間を抑圧しているというが、宗教の教えは、本来、人間を抑圧するものではない。神の戒め、ロゴス、天道と呼ばれるものは、真の愛を実現するための規範である。規範を守ることによって、愛が真なる愛として現れるのであり、規範を守らない愛は、かえって破壊的な愛となるのである。

9. 性道徳の破壊と宗教の否定

フロイトによれば、個人の幼児期の体験がおとなの社会に投影され、強迫的な力をもって集団心理の中に迫ってくる集合的神経症 (collective neurosis) が宗教であるという。つまり、宗教は、個人の幼児期体験の外界に投影されたもの、すなわち幻想であると言う。

フォイエルバッハは、不完全で不安な人間が完全であることを願い、理想的な人間像を心の中につくりあげて、それを外部に対象化して崇めるようになったのが神であるとして、宗教は幻想にすぎないと考えた。それに対してフロイトは、幼児期の無力感が大人の心に投影された集合的な幻想が宗教であると考えた。両者ともに宗教を幻想と見ているが、フォイエルバッハが宗教を個人の幻想と見たのに対して、フロイトは集団的な幻想と見たのであった。

そのように、フロイトは幼児期の心理を根拠として、伝統的な性道徳を破壊し、宗教を否定し、ひいては神の存在を否定したのである。しかしフロイト理論の土台となっているエディプス・コンプレックスや原父殺害説自体、根拠のないものであった。それは人間の心の暗闇を見つめたものであった。すなわち、エデンの園における墮落行為——神の存在を否定する悪の元凶であるサタンが引き起こした人間始祖の墮落行為——を反映するものにほかならない。そのような心の暗闇が取り除かれるとき、光の中に、実在する神が現れてくるであろう。そして、神の言に由来する性道徳を受け入れるとき、われわれは真なる愛の完成へと導かれるのである。

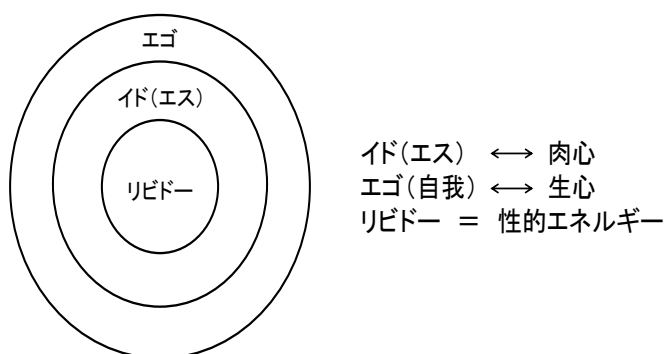


図1 フロイトの見た人間の心の構造

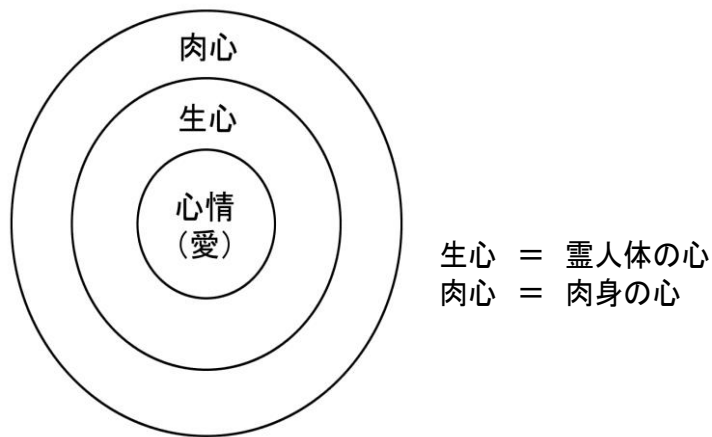


図 2. 統一思想から見た人間の心の構造

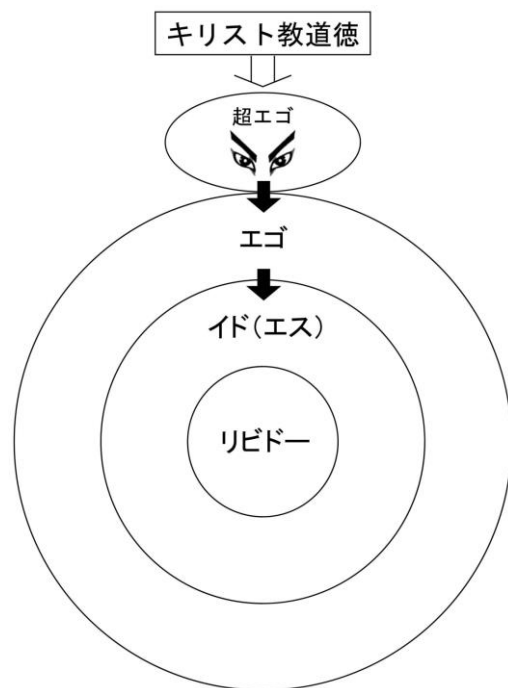


図 3. キリスト教道徳の下で抑圧された人間像

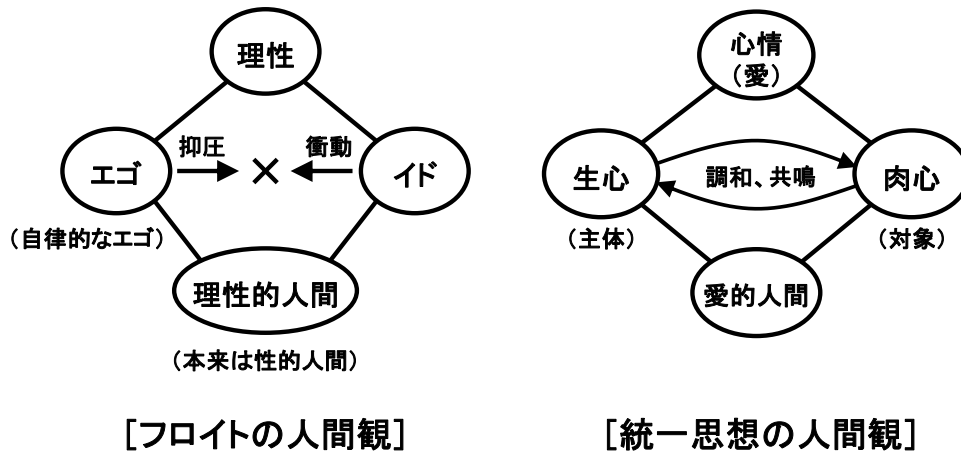


図4. フロイトと統一思想の人間観

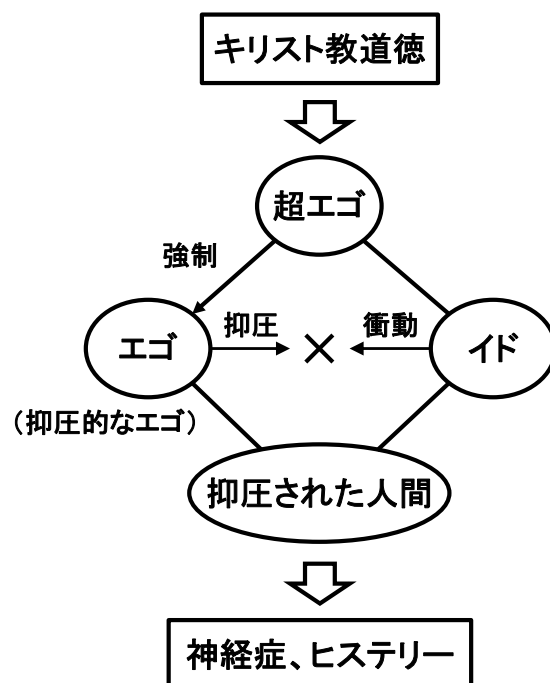


図5. フロイトの見た、キリスト教道徳下における神経症発症のメカニズム

野蛮なイドを昇華せよ

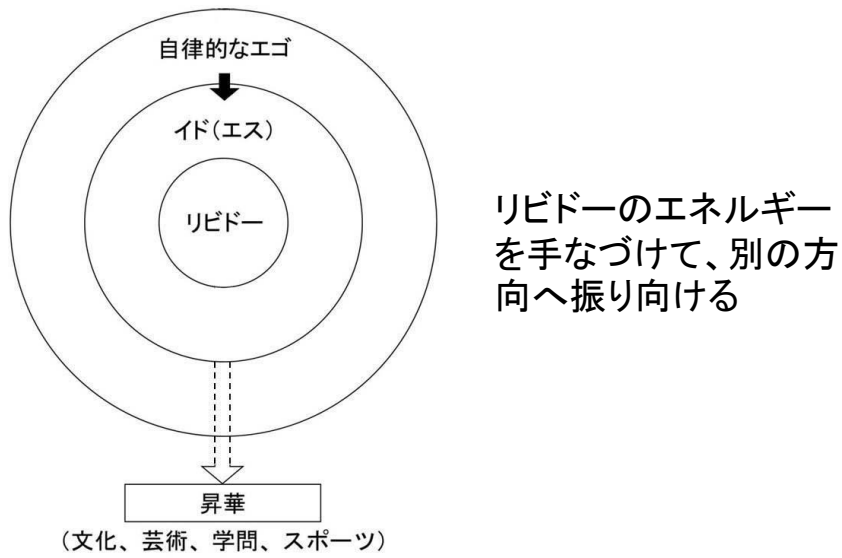


図6. リビドーのエネルギーの昇華

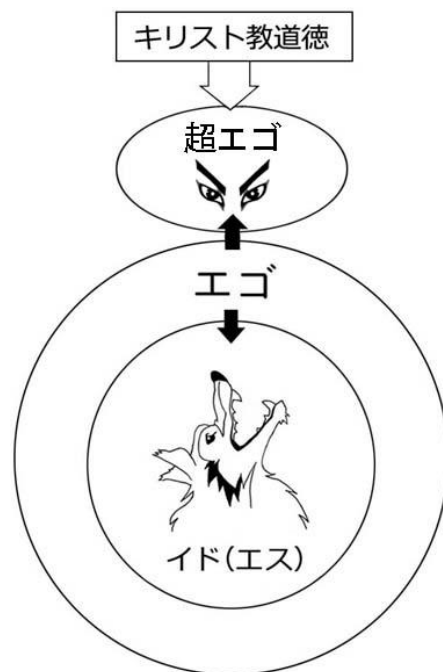


図7. 「イドと超エゴに対してともに闘え」

註

- (1) ラッセル・ベイカー、宮城音弥^{おとや}訳『フロイト・その思想と生涯』講談社、1975年、93頁。Rachel Baker. *Sigmund Freud for Everybody*, Popular Library, New York, 1955.
- (2) ラッセル・ベイカー『フロイト』159頁。
- (3) ラッセル・ベイカー『フロイト』159頁。
- (4) エーリッヒ・フロム、佐野哲郎^{てつろう}訳『フロイトを超えて』紀伊国屋書店、1980年、46-47頁。Erich Fromm. *Greatness and Limitations of Freud's Thought*, Harper & Row Publishers, New York, 1979.
- (5) リチャード・アッピグナネッセイ、加瀬亮志^{りょうじ}訳『フロイト』現代書館、1980年、56-59頁。Richard Appignanesi and Oscar Zarate. *Introducing Freud*, Icon Books, UK, 1999.
- (6) アンソニー・ストー、鈴木 晶^{あきら}訳『フロイト』講談社、1994年、78-79頁。Anthony Storr. *Freud: A very Short Introduction*, Oxford University Press, New York, 1989.
- (7) ラッセル・ベイカー『フロイト』197頁。
- (8) ラッセル・ベイカー『フロイト』199-200頁。
- (9) ラッセル・ベイカー『フロイト』198頁。
- (10) ラッセル・ベイカー『フロイト』214頁。
- (11) アンソニー・ストー『フロイト』153頁。
- (12) エーリッヒ・フロム、懸田克躬^{かけだかつみ}訳『愛するということ』紀伊国屋書店、1959年、127頁。Erich Fromm. *The Art of Loving*, Harper & Row Publishers, New York, 1956.
- (13) D. コーエン、加藤健二^{けんじ}訳『心と脳』河出書房新社、1998年、41頁。David Cohen. *The Secret Language of the Mind*, Chronicle Books, San Francisco, 1996.
- (14) アッピグナネッセイ『フロイト』144頁。
- (15) アンソニー・ストー『フロイト』88頁。
- (16) 小此木啓吾^{おこのぎけいご}『フロイト・その自我の軌跡』NHK 放送出版会、1973年、137頁。
- (17) エーリッヒ・フロム『フロイトを超えて』147頁。
- (18) アンソニー・ストー『フロイト』89頁。
- (19) アンソニー・ストー『フロイト』89頁。
- (20) アンソニー・ストー『フロイト』187頁。
- (21) ラッセル・ベイカー『フロイト』194頁。
- (22) 小此木啓吾『エロスの人間論』講談社、1970年、107頁。
- (23) ピーター・ゲイ、入江良平^{らへい}訳『神なきユダヤ人』みすず書房、1992年、41-42頁。Peter Gay. *A Godless Jew*, Yale University Press, New Haven, 1987.
- (24) ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人』51頁。
- (25) ピーター・ゲイ『神なきユダヤ人』49頁。

- (26) エーリッヒ・フロム、谷口隆之助^{たかのすけ}・早坂泰次郎^{たいじろう}訳『精神分析と宗教』、東京創元社、1953年、32頁。Erich Fromm. *Psychoanalysis and Religion*, Yale University Press, New Haven, 1950.
- (27) エーリッヒ・フロム『フロイトを超えて』49頁。
- (28) ドニ・ド・ルージュモン「愛」、『愛のメタモルフォーズ』平凡社、1987年、66-67頁。Denis de Rougemont, “Love”, *Dictionary of History of Ideas*, New Yorks Macmillan Publishing Com., 1973.
- (29) エーリッヒ・フロム『フロイトを超えて』149頁。
- (30) エーリッヒ・フロム、佐治守夫訳『フロイトの使命』みすず書房、1966年、169頁。Erich Fromm. *Sigmund Freud's Mission*, Harper & Row Publishers, New York, 1959.